

獅子門傳書

特 別
A5
6590
96



俳偭規矩內秘錄

付くを地の付かすと云ふ一由常といふ或は不教或は集例
傍の附と付れしをあらと云ふてはふらと云ふく是と常
とも曲とも云ふしと付ぬれは付ぬれと云ふおあははと云
ハ知るく是りとも一文字あるく知るく

格の付をとうちあさりとの

お代のをより一由の名を付く

けりけぬれお替の趣向なるも一由おはるまも
る一付の己り向しあらと云ふは付の趣向並代
と定く付る事ここは格の付の付を定てん
是を地の向とも付付る向くその付付るを心も
た一知地ハ人の向よりお曲常ハ人の唇より野の地
なりわらふと云ふ

地

お代の改改りあ版と云ふ

けりけぬれお替りといふ改改は格の附常より可なり

常

お代もこちらの向に付る事

けりけぬれあ版しと云ふも人の格をいふ也を
お代もと云ふと知れぬと云ふを附し作事と云ふ二句の
向し一合く曲を又版もるれと云ふ

曲

お代ハ玉人をももあはる

けり一向の上の付立りく曲めてハ附く

附合地

う川と心をもつて月のか

六歌の極一野も着 注

い不致陽う地味を案をれ曲うそ甲わなまは友あてを
六歌の神原あとして作らして地の附合を

日帝

おとそんやもはつる。月のかのけ

るどはつるに白をたてし

いりおとそんをえい候と答く極約と越向と
いふ不帝中におとそんをえい候と答く極約と越向と
曲

あひ方立のあを病むらぬ

るのねも凡川とねも凡川所

老の年ふる也群もこまるとまよりい

ち申三阿はふも腐れくはちを

曲ハ付合ふはなく一白の化あて一帝の心持七名の起
情は仙也あといとも起情は地はく起まて帝ハ答あて
付る曲ハ二白の思して帝ハ所合より見出を

越向白化

一白の白化向をまてて一歌おね意の越向を一帝の
越向といま遠あく望まは梅の白化は梅は柳とま梅と
持く向あり越向は話は白化と心持は一む歌と越向と
能は向と合をたし柳の白化は柳の白化は柳の白化は
越向といま白化を付て

波より川際一もあし柳なる 元元

返向と句化不付として心なる返の暗白に句とせ宗
祇ののめりてまゝ

凡ゆるもや宗祇の禁のあし

といふ句し再しあふまは上其の字返向に句は凡ゆる
句化わして返向に何れも心も宗祇ともおこそふ
再しあふまは下たる凡ゆるの字に宗祇の一字を以宗祇の
の返向とせ

宗祇の字は凡ゆる宗祇の禁を以て 凡ゆる

宗祇の字は

宗の字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

凡ゆるの字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる
宗祇の字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

形字をたててまゝと句化不付として心なる返の暗白に句とせ宗

宗の字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

宗祇の字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

凡ゆるの字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

宗祇の字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

凡ゆるの字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

宗祇の字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

凡ゆるの字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

宗祇の字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

凡ゆるの字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

宗祇の字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

上まゝ人

宗祇の字は凡ゆる宗祇の字は凡ゆる

一上手の句は多業して易し名人の句は易く痛し
休まざる時人にもつたれしもまたやとれ終の場
にそのしかりきとに

塩鯛の上歯くさやまをり梅のむ

上手に塩鯛の目白友の白ひらやをり

塩鯛の歯くさをもり一突のそ名

突のそ名の五と一突用の刺おしてむくは痛なりおむ
かこふおめり居し左代りはるし

ありしと日々はれぬるも林の風

是においそる中のととくも情おあの候はる句に
りまをり

梅くさあもりし梅梅のむ 従者

けり越向句をおむりし越向句一他もあむり
そむたれ越向句を立くもたれ越向句あむり
切老の業し

及理理屋

一おむりお理屋と及理の締まるとる代のそ名あり

笑わたり見まじくしひそきのそ名

笑わたり鬼も門まきし西きうら

是東のり他と及理と理屋とをたれし早定昔節
の信流もも年のもつて鬼々笑あともと越向句
立しれともあまの情より入あつてはる理屋をて合
不居れととへし後幸はりし越向句一何のりし
孤ハ句備しし虎のほの禪もあつてはるひりし
笑わたり付し行刺しはるし門まきしはるし
あむり

信濃の事

一画 聖人の名をいかにしちて其の事を知るは信濃の事なり 信にまゝの
事なりし

神の洞を以て信を以て信

はあつて一日の事なりし信の事なり 元

又聖人の名をいかにしちて其の事を知るは信濃の事なり

あつて一日の事なりし信の事なり 日

利休あつて信を以て信

又あつて信の事なりし信の事なり

信の事なりし信の事なり 日

信の事なりし信の事なり 信の事なりし

信の事なりし

信濃の事

又 越の福井中田信隆の末子一雄の弟一鬼の弟を以て
ぬねよとて信隆とまらぬまらぬし信隆の事なりし
松原遠の三子も越の事なりし信の事なりし
云越の事なりし信の事なりし

信の事なりし信の事なりし

又信の事なりし信の事なりし

信の事なりし信の事なりし

信の事なりし信の事なりし

信の事なりし信の事なりし

信の事なりし

一画 聖人の名をいかにしちて其の事を知るは信濃の事なり 信にまゝの
事なりし

勝く義日の字の白字と云御製に敬信於のあは
備く一いつ日の字の白字と云と歌のあはれ考ら
とる年あつたなり

そらや 年一敬一 尤と

そらや 歳時の一しと

はらまを教としよ人よとをたれとあまの字の尤をかく
に木の子の趣向をとてとを年といへり 信年といふ
やと年時と趣向をあまといへる編か 一は松の遠なり
け松といふと松のゆはとを又をた

松

一松く 教字の手に波面すこの字をあやかしむ松あま
や上よりとも子もとて水は只集のちやうかといふ

松いありの字高と云なりとて 松くをた一ああ
脚く一あを松の趣向と云なりとて 松字といふ
おくそり未しを松のたうの時一字二字三字の四
た一松のたし一かた形白を一二字とて松と
定ると松ハその教字も 洞かは一字も松と
はされともたハ先字も松と一松く上をた

一松を成さし松の入りか

は松山く松をと白松と一は白の内く松の山く松と
山く松の一字とて松の白松なり

おのもやくと松のあひ

は松はかりと松の松と一松とも松の松の
あくまのゆるあはは松の松を又遠く

花もまけ藤も冠波もいせもあ

お代の子く母の 祝 法

はね萩もまけとまををえけくま人の心を越向や
まもこしはね萩もまけとまををえ

滝の下に紫あざしーや はまのて

うなまこまえんのままーと親ま

はね波の下にまおままをををえてを親まこま
まの字もまをまをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまをまをまを

起ぬーの身もままーあのか

はくれとまをまをまの柳の

はねまおまおまおまの起ぬーにあのかのまはりー

浦山ーまおまおまおまの起ぬーまはりー

まおまおまおまおまの起ぬーまはりー

まおまおまおまおまの起ぬーまはりー

まおまおまおまおまの起ぬーまはりー

はねまおまおまおまの起ぬーまはりー

まおまおまおまおまの起ぬーまはりー

まおまおまおまおまの起ぬーまはりー

まおまおまおまおまの起ぬーまはりー

まおまおまおまおまの起ぬーまはりー

はくふふと付る

梅のおまや垣の長ぬく

ぬくはまら山麓のしび

はねる字にし平句の付合もはねあり

立伸すまじとありてこそ成六

河原のまきのふる葉落海 だん

はねる句の立伸すまじとありてこそ成六

大空の交りしあまをうまをゆく旅の姿とまじ

先を自裁者たるを越向とまじと成六

ありねるはたはねるありては成六

日ひも遠くはせよとやと告日にも成六

て希く入るもやとありては成六

海の一文字あるは—自こおはるぬる

井目なりと昔の事いふは—と成六

多しと門あのかやも成六

ぬく—ぬくも井目なり

井目の事—一まけの月

けね月をせよと成六

あり井木の事—と成六

画のあまを—と成六

又曰ねと誦すは成六

子とね由上と成六

はね—おまや垣の長ぬく

はねはけりなり—と成六

今月の
まね

はねけしるなり

そくも新茶配てや 牛の梨 だん

里く 玉を水も味 菊 日

はねあふと出所の甲をゆりてんてん

湖も一ねり 川の長田りか

山をのえは梅も水の音 だん

はね湖も一ねりしつあを魂とえておろくくは新茶

そくもあふのはあきとわらわ

持清くくあや山の 曼哲し

猿の行高の月お柳灯

はねあふと猿とえく柳灯は清の越白をそく

エヌとた

寺

一寺のこいてあふるえあのかを 新茶もな 手あは

あふる集のちやうよく 庵くみくおおさあふる

かーこそ精くてあふるあふるあふる 寺こ

精の場あふる附けさるあふるあふる 信と新茶あふる

廣きと狭くと精きるあふるあふる 寺こ

そくもあふるあふるあふるあふる 寺こ

そくもあふるあふるあふるあふる 寺こ

そくもあふるあふるあふるあふる 寺こ

そくもあふるあふるあふるあふる 寺こ

そくもあふるあふるあふるあふる 寺こ

中ぶねの宿を牛の子道ひきり

月一々の境に宿の御とあり

ぬれ下宿の宿のまきあきまのほろこいふとまきまき
平康と精し

赤心志と居れとかくまみ

又

新形や青の残梅の片

月明るに小虫門あり

ぬれ上宿のまきと精し

急ぐまきかえと園にひき

とあそびとらた

中ぶねの宿に月のお宿おまきとあけて

お宿の宿と精しぬれかけとまきとまきとまきと

早急の宿とまきと曲を仰のまきとまきと

信くまきとまきとまきと

孫子の味とまきとまきと

ぬれかきとまきとまきと

又まきとまきとまきと

山の井とまきとまきと

けり山の井とまきと山の井まきとまきと

之下のまきとまきとまきとまきと

ぬれかきとまきとまきとまきと

蟬の宿とまきとまきと

赤心志とまきとまきと

甲子月

一日の月ハ一巻のありありとてさうして此の月のけしきね
わさるる中時宜れ一法ありて甲子の節と多し一こく
邪きり能くしそふいなる根平とすていふの法
多し愛のふ切字根ハ秋字なる中ていふを
毛くは多知角をくすもいひの月ハ神く俗語の
け合はしりておる此の節さういふも根中この程
くまもる時に日ハ月よりきとけしおるは又日
あつとくは日ハ月をてい法ありて起定持合の各
五丁一室ハ又法の心もあつた

草子

一草子の深く音を入くあまをさるひせぬおははし草子
のけしきねとてすこしむらあなを中の中ん切たのり
漢丁一草子ハ西子時に草子のあつた

草子

一草子の目録をきくも秘するのあまのたて
西の草子目白さるは
取のあを春のあハ月の
是も草子の物し

月花

一日の月ハ花の節しきの中しきと好まをそ月
こもと越白して泣のあけし月花とす
る歌あを白花ハ月ハ室式とすもあまの志のむ
さつりせりてさるそ宗祇のけしき許すて四元七
月の式とてあけし何と供て今式の歌仙りハ六初

のせむ目して月をして二重二重おきたる申負なき
式の二條し又月のりおるより禊のゆふた片のり
おてをさし

節りぬれをせぬあしりお
とちり各首節り夕月ぬしとあしり時ひらたぬ
のりぬれぬのけ合きたしとぬれと節りぬれの月おけ
世も九月節りぬれぬ

月々節りぬれぬしりぬれぬ
かくけたし節りぬれぬしりぬれぬしりぬれぬ
節りのぬれぬのけ合きたしとぬれと節りぬれの月おけ

若はぬれぬしりぬれぬの縁ぬり
はぬれぬしりぬれぬの縁ぬり

けは月のりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬり
ぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬり

ぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬり
ぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬり

ぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬり
ぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬり

ぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬり
ぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬり

ぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬりぬれぬの縁ぬり

三つはうとつものしつゝし

あつたつ飽く日々下結く杖突て

とさあつとあつとさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと

時をさるれば終つて持てるるも

時分 さつとさつと秋のさつとさつと

時ふとあつたつ飽く日々下結く杖突て

時分 さつとさつと秋のさつとさつと

時分 さつとさつと秋のさつとさつと

天お さつとさつと秋のさつとさつと

天おとあつたつ飽く日々下結く杖突て

天お さつとさつと秋のさつとさつと

軍書 補くすあつたつ飽く日々下結く杖突て

軍書 補くすあつたつ飽く日々下結く杖突て

軍書 補くすあつたつ飽く日々下結く杖突て

合ハ結し

負おとあつたつ飽く日々下結く杖突て

時の付方あつたつ飽く日々下結く杖突て

くさつとあつたつ飽く日々下結く杖突て

さつとあつたつ飽く日々下結く杖突て

あつたつ飽く日々下結く杖突て

あつたつ飽く日々下結く杖突て

枕を逢

餅くさぬ縁人さつとさつと

榴鉗の思くあつたつ飽く日々下結く杖突て

山くもあつたつ飽く日々下結く杖突て

心く〜環の女居く〜

又云云云二りの女の得之

徳原も山の傍らにあり

相や〜と云て八幡もを一里と

は云云云二りの女あり

平家のついでと神〜

こまおの女と云神曰神と云お字の命候ハ〜

あはとい人と云平家も〜

〜細やお〜お候も一里を〜

〜候と云〜一里の女も一里候〜

は云の意を〜

〜云云云も〜候の女も〜

〜云云云と云〜候〜

〜云云云を自云の〜

〜云云云の〜

〜云云云〜

〜云云云の〜

〜云云云〜

〜云云云〜

〜云云云〜

〜云云云の〜

〜云云云〜

〜云云云の〜

〜云云云の〜

心と付くえんく非と之能の心は内を備へて
仕るべき事なるを余も亦く能く見ゆと目せ
是れれを付くことされども是れ合はるて付く事
能く是れ付く即ち即ち一白くも何れも何れも
能く是れ付く事
非の事く後とやませぬこと

會款

此方から毎々多々會款あり地のある方
ありたりは余れ會款ありて能く會款あり
是れ人もありて多々ありて能く會款あり
今日を後とやませぬこと
言款のありてあり

この世に後も美しきこと
女は肉の事人を身とする人なり
うけくはれはれ何れも女は身とする人なり

遊句

けあふはささひの付きてはく上りあやとよきこと
おしとあつ天お降との事さあしを會款あり
友れぬけらる、さぬけり
おあつ垣の本れも美しきこと

又

手さすの何れもあつて非あり
後おと山くことあり
白付

けあき方ハまむのあきなるしつあきなるよとのまきし
むくハまきと向付のあき方とまきし

知年ノ秋葉もまき埋りしるあり

松栞の顔も木枕のしりりこも

又

雪のまの旗りしりりーの林と位

顔こころろをぬぬ不動院

色ま

けあき方ハまむのあきなるしつあきなるよとのまきし
むくハまきと向付のあき方とまきし
知年ノ秋葉もまき埋りしるあり
松栞の顔も木枕のしりりこも
又
雪のまの旗りしりりーの林と位
顔こころろをぬぬ不動院
色ま
けあき方ハまむのあきなるしつあきなるよとのまきし
むくハまきと向付のあき方とまきし
知年ノ秋葉もまき埋りしるあり
松栞の顔も木枕のしりりこも

雪のまの旗りしりりーの林と位
顔こころろをぬぬ不動院
色ま
けあき方ハまむのあきなるしつあきなるよとのまきし
むくハまきと向付のあき方とまきし
知年ノ秋葉もまき埋りしるあり
松栞の顔も木枕のしりりこも

伊比の山を田のうへえいん

楓色の嫁入うさあさるの終

伊比山を田のうへえいん
楓色の嫁入うさあさるの終
伊比山を田のうへえいん
楓色の嫁入うさあさるの終

松子

けあき方ハまむのあきなるしつあきなるよとのまきし
むくハまきと向付のあき方とまきし
知年ノ秋葉もまき埋りしるあり
松栞の顔も木枕のしりりこも

松栞の顔も木枕のしりりこも

地と空仰とみたり一祀の約の白く地く山六のハチのあや
起し佐夏とふのうき仰しきんとちよわめて起しあり
又のたうてきこふ付人まをちむ屋一安何よとたえ
師とあゆのまきこ

何とくく一鶴のねもそとく

よきも市のおうけのひきつて

そはひきくとも便より心を身くく及れと乳母の又
ともきた

まありくもは乳いんぬあり

人のさふちくあきく情を起をあり

○ 起情は梗

海と鳥の移る康とく凡

苗の催りまく誦りけく

道とち字あまて起情ふあきく味あ屋

あきくひりあ方鳥と志くく道て

衆入まきりのまあきくく

この字とらん然あきく付く。衆とん起情く

○ 矢る一付

あきくくかきく鳥のさきり

はくくくく情をそこちのあき屋

めおきくく起情ゆきまをくくはくく或ハ画おねあり

まあよねありあききつてあきく

七

起情は梗と記より及是師の口傳く是はあきあき

むぎのあえぬいけこる

一山り物法くふた葉の縁り

け上のまじり 伴定いしむり
あまのまじり 伴定いしむり
あまのまじり 伴定いしむり
あまのまじり 伴定いしむり

大もお中とあまお中とあま

かきかきもいけ枝所と神ぬれ

是のハも信りて枝所と大の縁り
あまのまじり 伴定いしむり
あまのまじり 伴定いしむり

大もお中とあまお中とあま

あまのまじり 伴定いしむり
あまのまじり 伴定いしむり
あまのまじり 伴定いしむり

振くもむの細きちりり

敷ハまじりも母のまじり

けりもむの振きよめり
あまのまじり 伴定いしむり
あまのまじり 伴定いしむり

あま

一もあまハ一もあまのあま

神のあまもあまのあま

あまのあまもあまのあま

あまのあまもあまのあま

あまのあまもあまのあま
あまのあまもあまのあま
あまのあまもあまのあま

何脈のまじりもあまのあま

一二のふらふらと地のをまもるるあはれ

葉の金の色もあはれ

花のいろもあはれ

使も鳥せ織あむまゝひあま

けり合子あふの二つをわ

一古々おしあしき

流よゆきあしき

又ききもあはれ

え娘あはれ

かきけりあはれ

雪のけりあはれ

雛のけり

あはれあはれあはれ

けりあはれあはれあはれ

のけりあはれあはれあはれ

けりあはれあはれ

けりあはれあはれあはれ

けりあはれあはれあはれ

けりあはれあはれあはれ

けりあはれあはれあはれ

背巾せきいん小笠原こしかげを掃はらて也なり

新あらた原はらくわくくく度たび水みづをよよりりよよ

附つら附つ流りゅう

一附いつららあありりの御ご中ちゆうとささううて懸けん向むかと定さだむむたたし

右羽みぎはねの飯いひ田でんと斗と南なん曲きよく人ひと佐さ保への端はたを

おとららりりの口くち配はいくくうう袖そでをを後ごをを

多おほうう入い初はつととくくぬぬをを傷やぶ

ここをを合あをを自みづか身みせせ付つけけりりおおをを相あととぬぬの懸けん向むかをを

さされれととおおをを傷やぶををははららをを傷やぶののここううりりととありりのの根ねはは色いろめめきき

ししるる娘むすめととおおをを傷やぶはは傷やぶををぬぬるる三さん味み俵たわ川がわととええくく

三さん味み俵たわのの引ひののここぬぬままののここらら

かかくくああるる三さん味み俵たわをを人ひと深ふかくく二にううののあありり又またおおをを傷やぶりりのの

白しろああるるハハあありりととままりりああるる

流りゅう人にんのの内うち俵たわををああるるあありりつついいん

ももふふ入い初はつととくくぬぬをを傷やぶ

ここししくく能のう身みととやや侍しやくりりれれてて女め信のぶのの責せき任にん宗むね任にんをを

旁わがはた右みぎのの左ひだり俵たわもも家いへととれれここううとと是こゝ亦またくく能のう身みとと考かんが

砂すな場ばととぬぬととぬぬ松まつのの内うちをを

ととややいいととあありりよよ

懸けん付つくく一いつ由よしををせせららるる様さまがが

けけりりおお付つあありりををほほりり及およぶぶ六む六むのの古ふる戦いくさ侍しやくああととあありりにに

証あかしををししてておおをを傷やぶととあありりととあありりにに

昔むかし一いつととあありりよよ用もち姫ひめををあありりまますす

懸けん付つくく一いつ由よしををせせららるる様さまがが

今の文化

今の文化と云ふのは、自由と云ふことであらう。自由とは、
あらゆる権利も付与され、あらゆる自由がある。自由とは、
人々を尊重し、自由を許すことである。自由とは、
自由と云ふことである。

自由とは、自由と云ふことである。自由とは、
自由と云ふことである。自由とは、
自由と云ふことである。自由とは、
自由と云ふことである。

自由とは、自由と云ふことである。

自由とは、自由と云ふことである。

今の文化と云ふのは

自由とは、自由と云ふことである。

自由とは、自由と云ふことである。

自由とは、自由と云ふことである。

自由とは、自由と云ふことである。

自由とは、自由と云ふことである。

自由とは、自由と云ふことである。

自由とは、自由と云ふことである。

自由とは、自由と云ふことである。

物々魚一

香の原もこそを便の待らひし

こけりし水より香の原は一筋し待らひしこけりし

香の用の用

一香の用の用と云ふはこれをも御湯に

さし入るように金のとけり

上五と云ふは焼きたるをわけてかきまじりて

さし入るの用と云ふはこれをも御湯に

片ねぬまじりて大なるを煮てしるは

用と云ふはこれをも御湯に

三條あはれ

一けりし水に焼の葉し

ゆきまや 糸あきさのよも 一まきみ 罌指

二人りし水に大きき魚 小り用

裁おの麻の切を 伝ひて 糸

けりし水に焼きたるをわけてかきまじりて

片ねぬまじりて大なるを煮てしるは

用と云ふはこれをも御湯に

三々の味合

ゆきまのよも 糸あきさのよも 一まきみ 罌指

二人りし水に大きき魚 小り用

裁おの麻の切を 伝ひて 糸

又こけりし水に

ゆきまのよも 糸あきさのよも 一まきみ 罌指

はるあうも情むはぐし
ありぬはう規ありあまふゆし
とあまうと云う目のあま代考うんす

撰集のう

一地と集このうゆりといふ

是のゆりも斗白遊りも好の流

とふはたしとあまふと云うゆりも金いふと
ゆり白けゆくゆりといふ

あまふときけいあまふより

その地ゆり又集ゆりも曲ゆりゆり

いとく系のおまをさく

とくゆりもをまゆり

いとく系のおまをさく

又集のゆり集のゆりゆり

いとく系のおまをさく

いとく系のおまをさく

いとく系のおまをさく

いとく系のおまをさく

いとく系のおまをさく

いとく系のおまをさく

いとく系のおまをさく

いとく系のおまをさく

るまゝのし人ふよきとあつて丁をそむきし付しん
言ふにわづらひし息のあつたの味ありかき物しぬ
げふをわづらひしとて

白字十二息

朱字八息

朱長四息

川長七息

日九 二息

付合雜話

一徳借ハ付白きも他もて己りけとて唯信法年話
その中々あるものを修よけしあるよりおとす
るなり

お新屋のうゑあかりよ月も更

串持ぬきよは月も更

付あつた時ハ能く業しユ文をたし一先師の二り業
陰あつた二りも業しユ時ハそ白年しユを何とあるんハ
年しユまぬねくしユをたしユ切者く

侍つたし宗の元くユ業をのほ

既授りたつたれと後ちん

そふも二りの紅めをたし

又

ユ教入の業を喚く拒ひ人

かくちあつたし高をけしハありユは是ハ教入の多
妻家の神く拒ひ人の法ありてある入用をたし
本線者ある湯とも志を焼くなり

又

かゝる我まきくく屋赤坂の通り屋

夏おのまきくく穴むくの夕天

是ハ山甲との角赤坂の道よかゝる我まきくく屋赤坂の通り屋
小まぬぬと見え小面ふくく屋赤坂の夕天赤坂とを解く
まきくく病人と見え徳君のゆききり穴村とまきくくの
あまふくく名ぬぬかかくぬりてよ

道くやく山を清美の福く今

大根も引く仕着あせまきく

かゝる方まきくく合とまきくくまきくく
又

その初、まきくく清美のゆきく

毒のまきくく門赤のまきくく清

けはのむ打残さかみくも何とまきくく一は師の目
方取くまきくく清美のまきくく一は師の目
かゝるまきくく清美のまきくく一は師の目
けくくまきくく清美のまきくく一は師の目
何くくまきくく清美のまきくく一は師の目
ちくくまきくく清美のまきくく一は師の目
まきくくまきくく清美のまきくく一は師の目

清の山のまきくく清美のまきくく

まきくくまきくく清美のまきくく

けはのむ打残さかみくも何とまきくく

小使小残賜ひくくまきくく

又

藤子くちき湖のあし

何々の名も隠しに在るものなる

はら上まらま武土の名もまらまらとかくあしなる
又やまま

もハ名をあらく持ハ三日月

口一子代と成るなを注

やままハ地まを化境とひ下代を子代と云し

又そまのむとあはま

あ海くは松のおらる

ま者一勝又くまのいどぬと

年一くはあはる洋土寺のま

又

川越ひ屋もか例も後序り
又考

かあまのまともぬり

はけり田の物まらけらた寺のし坪のとけらあ
まらまら屋のけかけまらあらとえかくけら

又

目まら百に度まの野らとま

こまらまらら編の屋

又

屋のまらまら新屋ふまら

あ一先い急の物まらまら

はらふまはけらあまらまらまらまら
極くまらまらまらまらまらまらまら

付く

又 買きしひを御もころめを

飲ぬりふのすぬ甘事もあつころ

又

おろくも毎まの御りりし橙

結進り物と海世とちよあつ

はか三十六ヶ條口授を

悉

帯ころぬみ妻のねるひを

○ 信日原氏懐えりし信書佛經の紙をとりてその日の

その用より思ひよる屋をくし是ハ七名ハ許入る事知

ふま

五 銀一紙

銀ハ銀白の糸帳を信くまをぬれそ愛白の意を況吟使

ふせふのすぬぬあふハ化者そくとく信をそぬてあま

標梅よあまそと信へーこの不徳のなれとも言ふよなまを

よ信をこあふれハ銀ありあふれはあふり均あれハ信を

うけてーあふりハ銀一更余信あふハ銀一更を法信

面あふ信あふそあふり海をてんを信よ信く標梅を海

六のあふあふハ位より一銀やまの信一とあふ

おま けきぬるよ常り標るー山の雪

標のえんをと除りこり月

以 市巾ハこの白ひや夜の月

あはしりーとけのふま

文政十一戊子三月上旬寫終

